

知事と県民の意見交換会（北秋田地域振興局）議事要旨

- テーマ：令和を生き抜く！～これからの北秋田地域の仕事のありかた～
- 日時：令和元年7月9日（火）9：30～12：00
- 場所：東光鉄工UAV事業部

視察

※東光鉄鋼UAV事業部を視察

知事挨拶

本日はお忙しい中参加いただき感謝申し上げます。この会は毎年ブロックごとに開催している。昔は知事が地方に出張して地域の方と意見交換すると、集まる人が市町村長、市町村議会議員、農協組合長、商工会長、観光協会長等、全て「長」がつく人たちであった。今も「長」がつく人たちとの意見交換はたくさんあり、県の施策を作る際、全県、あるいは地域の長の人たちの意見は、地域の整理された意見であることから、そういったものを元に、政策のある程度の予算付けができる。ところが、地域の現場に即した運用になるかということ、それだけでは足りない。現場で汗を流して苦労している、第一線で働いている方の意見とミックスすることで、制度設計もうまくいく。今日は、「これからの北秋田地域の仕事のありかた」ということで、皆様が今実際にやっていること、悩み、今後の課題、自治体との連携の可能性など、お聞かせいただきたい。

参加者自己紹介

（B氏）

大館市出身。進学で秋田を離れ、卒業後は損害保険会社に就職し全国転勤の仕事をしてきた。約6年前、結婚を機に大館に戻ってきた。妻が当社社長の娘のため、いわゆる娘婿の立場である。4歳の息子と2歳の娘の父でもある。当社では、営業や経営企画の仕事を経て、現在は総務部長として会社の裏方の仕事に従事。今年4月に開園した企業主導型保育施設の担当もしている。

（C氏）

大館市出身。神奈川で進学・就職し、3年前、13年ぶりに地元に戻ってきた。神奈川では電機メーカーで機械の設計の仕事をしていた。戻ってくるに当たって、機械の仕事を生かせるところがないか探したところ、ドローンという新しい技術に取り組むということで、当社に就職した。東京などの会社で開発するよりも、秋田で開発すると土地も広く、制限も少ない。今後も秋田でのドローンの発展に携われればと思っている。

（D氏）

大館市出身。枝豆の園芸メガ団地を始めて4年目。トータルで180ヘクタールの土地を地域の方々から任せられ、水稲、枝豆、大豆、キャベツをやっている。就農して19年目であり、19歳からずっと農業に携わっている。

(E氏)

能代市生まれで、小中高と茨城で過ごし卒業後秋田の出版社に勤務。2011年、結婚を機に大館に来た際、6歳・4歳・0歳の子供がいたため大館でいい再就職先が見つからず、自営業として自宅で子供の面倒を見ながら働くという働き方を選択。今は3名のお母さんと仕事をしており、駅前の子連れOKのシェアオフィスで子供を見ながら仕事をするという形でやってきた。お母さんが、子供を保育園に預けて働くという以外の働き方ができる秋田県になるといいなという思いで活動を続けている。

(F氏)

北秋田市生まれ。東京で進学したが、秋田県育英会の東京寮に住んでおり、ずっと秋田県人と暮らしていた。卒業後、秋田が好きだという思いがあり帰郷、新卒で当社に就職して今に至る。主に自治体・福祉施設向けの機器を販売している。結婚して子供が2人おり、家族皆で地元で暮らしている。

(G氏)

北秋田市出身。土木技術者として建設会社に勤務。建設会社を営む父の姿を幼い頃から見ており、同じ仕事をしたいと思い、秋田県立農業短期大学卒業後、迷わず当社へ就職した。実際に仕事をしてみると、天候に左右され休日返上を余儀なくされることもあるし、女性は男性に比べ、結婚・出産・育児など、どうしても負担の大きい面がある。しかし、社長を始め、上司や同僚など、周りの人たちの理解・協力によって仕事に専念できていると感じている。昨年12月5日に北秋田建設業協会建設女子部会「わかば」が設立され、その会長を務めている。

(A氏)

大館市出身。埼玉の大学を卒業後、秋田に帰ってきた。転職を機に当社へ就職。現在は営業部に所属。当社は、千葉県にある会社の子会社。研修開発をする会社が松戸にあり、大館が生産拠点となっている。大館から作られた装置の9割が海外へ出荷されており、知名度は低いですが、地元大館で地味ではない仕事をしている。

(知事)

mamaplanでは、どういう仕事をしているのか。

(E氏)

自分は取材をして記事を書くライターをやっている。もう一人の女性は、ホームページを作ったりチラシをデザインしたりする仕事、もう一人はパソコンを使う仕事が得意なため、データを作ったり校正したりする仕事。それぞれのスキルを持ち寄って仕事をしているため、もし4人目の人が加わったとしたら、その人のできることが業務に加わる形となる。

意見交換

(司会)

次に、皆さんのこれまでの経験や現在の立場等を踏まえて、克服しなければいけない課題、必要な職場環境、今後の展望等を含め、意見交換したいと思う。

(B氏)

企業主導型保育施設の担当ということで、経緯について説明させていただく。約3年前、当時のグループ会社において、出産後に子供を預ける先がなく復職できない社員がいるという事案が発生した。当時の経営陣の話合いの上で、大館市には待機児童が多いということが分かり、それでは自社で保育環境を整えようという話になった。当時は小規模の託児所を想定していたが、市役所から国の助成金制度を紹介され、企業主導型保育施設の導入に至った。

この制度の強みは、認可外保育施設であり、保育料の設定、保育時間の設定など、企業の考え方に応じて自由な制度設計が可能な点。一番の利点は、自社の社員がいつでも子供を預けられ、安心して働くことのできる環境があることだと考えている。保育の運営に関しては、市内の小規模運営施設に委託しているため、開園当初からレベルの高い保育を提供できている。社員や地域の皆さんからは、安心して子供を預けることができ、大館市の中心地であるという立地や料金設定についても、非常に高く評価されているところである。

反面、これが内閣府の制度であり、レスポンスの遅さや、担当者によって回答が異なること、事務の繁雑さ等が大変だと感じる。度々ニュースでも取り上げられているが、申請件数に対して委託先協会の体制が不十分であることが考えられる。当社は幸いにも助成決定となったが、全国の4割が申請を通らず、申請に労力がかかる割に非常に狭き門という現状である。今後は、地域や社員の皆さんに喜んでいただいているので、長期にわたって安定して運営していきたいと考えている。

(知事)

今、利用者は何人くらいいるのか。

(B氏)

園児は27人の定員に対し17名で、地域枠はもう満員となっている。

(知事)

内閣府には専門家がいいため、確かに県が制度を利用する際にも苦勞する 때가 ある。

(C氏)

ドローンの開発をするに当たり、閉校した小学校の施設を利用させていただいているが、こんなにドローンの開発をするのに適した所はないと思っている。ただ、部品の9割が中国製であり、品質問題もあるため、秋田の部品を使って秋田発ドローンを作っていきたいと考えている。こういうときにどういった企業と連携できるのかを模索しているところである。プロペラの解析を行う際、秋田県産業技術センターにお世話になったが、センターには高額な機器がたくさんあるため、どんどん活用していきたいと思っている。研究員の方に他メーカーの紹介をしてもらったこともあるため、今後もセンターへの支援を続けていってほしい。「秋田発」をもっと押し進められるよう、横のつながりを大事にして仕事をしていきたいと考える。

(知事)

全ての部品を地域の企業からまかなえればいいが、他の部品との相性が製品に大きく影響するところであり、難しい問題である。

(D氏)

平成18年に30ヘクタールで始めた会社だが、最近では180ヘクタールまで増え、現在の社員は9名、役員は3名。土地が増えるにつれ効率が求められ、できるだけ時間をかけずに同じ品質でやらなければならないようになった。社員は少しずつ増やしたが、すぐ農業のできる人材には育たないため、データを取って効率化を図り、誰がやってもやり方が分かるよう、方法を変えていくことにした。

人口は昔から少なく、これからも増えることはないため、スマート農業やドローンの活用などは検討していかないといけない部分である。労力を減らす技術を秋田にどんどん持ってきて、少ない人数ながらも面積を広くしていき、一人一人の手取り額を増やせば、農業が儲かる業態になるのではないかと思う。農業は工夫すればするほど面白い業種だと思っている。課題としては、人口減少はしょうがないことなので、人がいない中でどうやっていくのかということである。

農業法人では珍しく人事評価制度を活用しており、評価の基準などをオープンにして、成長できた分を給料・ボーナスに反映させている。ここ2年くらいは社員の意識が変わってきているのかなと思う。この先に、農業分野での「働きやすい職場」のモデルがあるのではないかと考える。

(知事)

農地の確保・集約化は順調にいったのか。農地中間管理機構を使ったりしているか。

(D氏)

農地中間管理機構からいただくこともあれば、近所の高齢者から土地を貸していただいたこともある。土地購入を依頼されることもあるが、それは検討しなければならない事項。できるだけ放棄地にしないようにいろいろと工夫しているところである。

(E氏)

Bさんが言っていたように、待機児童が県内で一番多いのが大館市。各種会議でも待機児童問題とその対策について話し合われている。保育士不足の中、子供を預けられなくて働けない人、手のかかる時期を自分の手元で育てたい人など、そういった人たちが自分の時間を使った働き方ができるようになれば、待機児童の解消につながると思う。

私たちは、自分の子供を連れて仕事をするというスタイルを少しずつ確立してきており、秋には、空き店舗を使って子育てカフェをオープンし、子供が遊べるスペースと、お母さんが作業できるスペースを作って、子供を連れて仕事ができるような施設にする予定。またお母さんが子連れで集まれる場所が少ないという声が数年前から挙がっており、そういったお母さんや助産師の方が施設に集まれる機会を月に1回ほど設けたい。気軽に子連れで集まれるような場所にできればと考えている。

施設運営に当たっては資金が必要であり、スギッチファンドを活用しているが、申請の際審査員の方から「それは行政がやることではないのか」とも言われた。人手がない、予算がない、維持費をまかなえないなど、一団体としてできることは限られている。行政もこういった場の必要性は感じているだろうから、しっかりサポートしていただけるとありがたい。

また子供を預けたいお母さんと、預かれるお母さんをマッチングする子育てサポート事業も実施したいと考えているが、この事業について市に相談してみると、是非やってほしいと言われるものの、場所を提供するための予算がないと言われる。予算がなければ我々

がタダでやっていくしかない。子育て面への支援を何とかお願いしたい。

(知事)

自分の職場に子供を連れてくるというのは、個人完結型の仕事であればできるが、県庁などの組織的な職場ではなかなか難しい。企業内保育とまではいかずとも、社内に託児スペースを作る際、市町村が負担する費用を半額助成する支援を県では行っており、秋田市で実際に行っている。

秋田市であれば待機児童がいるのは理解できるが、人口減少が進む大館でなぜ待機児童がいるのだろうか。

(E氏)

企業に余裕がなく、育休が長く取れないお母さんが多いことが原因の一つかと思う。

(知事)

このあたりには、小学校区単位で児童館はあるのか。

(E氏)

小学校区ごとに放課後児童クラブがある。

都会のお母さんだと、入園の申込みをして落ちた場合、子供と一緒にいられる時間が延びると喜ぶが、ここでは、落ちてしまうと、収入がなくなる切実な問題である。企業が復帰をしっかり保証することができていれば、子供が1歳になってから保育園に入れることもできるが、そうならないため、一番保育士の人数が必要な0歳児の子供を預けなければならないお母さんが多く、待機児童が減らない要因になっているのだと思う。

(F氏)

個人的な子育て面からの課題から言うと、自分の仕事が忙しく家事・育児を妻に任せっきりになっているところが個人的に問題だと感じている部分であり、企業主導型保育施設についてはすばらしい制度だと思った。当社はIT企業であるため、働き方改革としてサテライトオフィスやリモートワークを活用しようという話が出ているところだが、まだ活用できていないのが現状である。この課題をクリアして、家族と一緒に過ごす時間を増やしていかなければならないというのが個人的な思いであり、会社としても取り組まなければならないことだと考える。

また、県北をリードするIT企業として、地元の優秀な子供たちともっと関わっていきたいし、子供たちが戻ってきたときにこういった企業で働いてもらえるような取組が必要だと思っている。昨年、プログラミングの教室を開校したところだが、まだ定員は1名しか埋まっておらず、今後の工夫が必要だと考える。

(知事)

プログラミング教室は、そちらの会社で運営しているのか。

(F氏)

秋田市にある会社のフランチャイズとして、大館校を開校している。

(知事)

まだ親世代が重要性を分かっていないのかもしれない。いずれ必修科目となるため、塾だと思ってやってもらえればいいのだが。

(F氏)

体験入校をやったときはたくさん人が来たが、実際にお金を払うとなると躊躇してしまうのかなと思う。まだ親世代の意識が足りてない、時代の流れについていけないのかなと感じる。

(G氏)

「わかば」の活動としては、女性が活躍するために必要な知識をつけるための職長教育や、技術的な教育など、女性が働き続けることができるような環境づくりに取り組んでいきたいと考えており、特に現場代理人になるとやりがいが大きくなり、仕事に対するモチベーションが上がるため、若い人たちが目指す要素のひとつとなっている。また鹿角の方でも女子部会があるため、現場見学会や意見交換などを実施したいと考えている。

働く場の環境という点では、女性は結婚や出産などで仕事をストップせざるを得ないという現状がある。今はインターネットを利用して自宅で働くこともできるため、そのような仕組みの実現に向けて動いている。一気に環境を変えることは難しいが、少しずつ取り組んで、そのような環境を広げていく存在になればいいなと考えている。

最近、「わかば」のメンバーで集まって仕事の話をすることもある。「わかば」のおかげでこのような仲間とつながれたことに本当に感謝している。メンバーに、女性技術者として働いていてよかった点などを聞いてみると、現場の雰囲気明るくなったり、現地住民の方と話がしやすかったり、周りの男性が気を遣ってくれること、現場とのコミュニケーションが取りやすいので現場がスムーズに動いているように感じるなどの意見が出ている。

また県では、女性トイレ環境の有無を重視してくれているため大変助かっている。ただ、大きい現場ではそうなっているが、小さい現場ではそうっていない。

これから建設業で女性が活躍するには、働き続ける環境作りが必要。自分自身、会社で育休を取得したのは初めてのケースだった。年子だったので2年近く休むこととなったが、会社の理解があったためできたことだと考える。独身時代にがんばってきた女性が、結婚・出産・介護などで休業しても復帰できる環境を整えている会社をもっと増えてくれれば、専門技術を持つ女性がこれまで以上に活躍できるのではないかと。また復帰したとしても、子供の面倒を見るためにスムーズに仕事ができないこともあるが、そういった際は男性が補ってくれている。女性技術者は、育児・家庭と仕事との両立をしながらがんばっているため、女性技術者がいる現場へは県からも配慮をいただくとありがたい。

今必ず周りの人たちが助けてくれるため、女性だからできないと決めつけずに、実際に現場に来て、女性技術者の話を聞いてほしい。「お母さんが作った道路だよ」と、自慢できるような仕事である。

(知事)

女性の建設業への就労は、県も担い手育成センターを設置して一生懸命活動しており、例年女性の新卒での採用は4～5人だが、今年は27、8人だった。これは、保護者が女性が力仕事をするのは危ないというようなイメージを持っていたため。秋田では、保護者に対する情報提供が不足気味である。地元の良い会社があっても、「いい会社は東京にあ

る」と考えてしまう。今年は農業の担い手センターも設置し、女性の就農も推進することとしている。

県の発注工事では、ある程度の規模のものでは、トイレ、休憩室などの設置を単価に入れて計算しているが、小さい工事となると、全体に占める割合が大きくなってしまい難しい。市町村レベルだとまだ標準ではないため、建設業協会から市町村にお願いすることにする。このあたりの意識改革は、行政がリードしていかなければならない。

(A氏)

当社は全員が正社員で、男性が4割、女性が6割。工場は1987年にできたが、当時は珍しく女性用トイレ、更衣室が元々完備されていた。そういったこともあり、国のユースクール認定を受けている。時間のメリハリがついた職場で、17時30分には工場が真っ暗になり、上層部も帰ってしまう。プライベートを充実させられる企業であるため、離職率が低く、ここ3年は1人も離職者がいない。昨年度、今年度と2人ずつ入社いただいております。大変恵まれた環境にあると感じる。また男性は遠慮しがちだが、女性は育休・産休は当たり前である。妻も働いているが、むしろ自分が主夫業をできるような環境であり、当たりのことが当たり前にできるメリハリのついた職場である。会社説明会で説明しても「本当ですか？」と必ず聞かれる部分である。

今はDNAの解析が最先端の医療技術のひとつとなっており、やりがいに繋がっている。ただ、社員の高齢化が進んでおり、これからどんどん人を入れていかないといけないと考えている。地元企業が強く生き残っていくためには、県と教育委員会、地元企業が三位一体になって、人口減少を止めなければならないと感じる。

(知事)

今社員は何人いるのか。

(A氏)

約80名である。

(知事)

医療・薬品関係は、これからも世界のトップを走る分野であるため、今後も世界的に需要が出てくる。スマートフォンのように、部品があればぱっと作れるような世界ではない。そういう点で、製造だけでなく研究の分野も含めて、大館・北秋地域で完結できるような仕組み作りに取り組んでいるところである。

(司会)

次に、もう少し幅広に、皆さんがふだん見たり聞いたり感じていることを、北秋田地域だけではなく県全体で、状況の変化に対応するに当たっての課題や支援策などについて意見交換を行いたいと思う。

(B氏)

会社としては、地域の人材を確保することも大事だが、自分のように、一度地元を離れて、地元に戻ってきたときに受皿となるような会社でありたいと考える。建設業のスキルだけでなく、都会で得たスキルを生かせるような職がある会社としてやってまいりたい。

そういった中で、地元の生徒に対する合同説明会の場を増やしていただいていることが

大変ありがたく、地域の子供が将来都会に出ていったとしても、戻ってきたときの選択肢として紹介できるため、今後も幅広く実施していただければと思う。

（司会）

今お話しいただいた企業説明会について、最近は高校生だけでなく中学生向けの説明会も振興局で開催しているところである。生徒本人に地元企業について知ってもらうことも必要だが、本人の選択に影響を与える学校の先生や保護者にも情報提供する必要があり、呼びかけをしているところだが、特に保護者にはなかなか足を運んでいただけていないため、今後も取組を続けていきたい。

（知事）

秋田のジェイテクトという会社は、元々豊田工機という名前だったが、ジェイテクトという名前にしたら誰も応募が来なくなったという。「トヨタ」と付くと応募が来るようだ。そのため、募集の際に「『トヨタの』ジェイテクト」と紹介したところ、応募が来るようになったという。

保護者は名前のイメージに影響されやすいが、大企業だから安定して安心ということではなく、むしろ地元で昔から根を張っているような企業の方が強い。そういった情報が、農村部だと特に入りづらい。そのため、中学校の頃から地元の多種多様な企業について情報提供して、自分の将来の選択の幅を広げるのは大事。今はかなり変わってきたが、学校だと、県外に行く生徒が優秀だという意識があるため、それをなくさなければならない。当然、全ての人が地元にいる必要はなく、外に出ることも大事。ただ地元でいたいのに情報がなく、仕方なく県外に出るとするのがマイナスである。行政でもPRを続けていくが、企業の方も、上手にPRしていかなければならない。

（C氏）

展示会で東京に行くことが多いが、ここを朝一番に出ても東京に到着するのは昼過ぎ。移動の時間がとてもかかると感じている。電車の本数もどんどん減り、交通の便が県北地域は特に悪い。新青森駅に新幹線が通って、大館駅の電車の本数が増えると思ったら、逆に減ってしまった。自分は大館市移住者の会に所属しており、よく食事に行くが、せっかく移住してきたのにまた戻ってしまったという話も聞く。秋田には魅力がたくさんあるのに、魅力を感じられていない要因のひとつが、交通の便だと感じている。使う人が少ないから減るのだとは分かっているが、便利になれば使う人も増えていくのではないかと思う。大館能代空港を使っても東京着が12時を過ぎてしまうし、昔は大阪便、札幌便があり夢があったが、なくなってしまった。そのあたりの利便性があがってくればいいなと思う。

（知事）

確かに、中央・県南と比べると、県北の交通の便は劣っている。高速道路は間もなく全線開通するが、鉄道は非常に難しい。JRは民間会社のため、ペイするかしないかで決まってしまう。男鹿線では、市が観光客誘致に力を入れていることから、珍しくJRが新しい駅を作っている。秋田駅周辺の開発も、新幹線で観光客が今後も増えることを見込んで、JRが手がけている。問題は県北で、内陸線はインバウンドのおかげで何とかやっつけているが、地域にネタはたくさんあるのに、お客を増やそうという意識が他地域より弱い。横手市の増田は、10年前は誰も通りにいなかったが、今は大勢の観光客であふれている。また中央・県南では、どんな小さな祭りでも各地にポスターを貼るが、県北の祭りのポス

ターはあまり見かけない。最近はきりたんぼ祭り、肉博などやっているが、県内からの客が多い。最近秋田犬の影響でインバウンドが増えてはいるが、県北全体で観光に対する思い入れを持ち、連携することが必要。乳頭温泉郷の女将さんは、度々台湾を訪れたり、旅行会社を訪れたりして、PRをしている。

需要の見通しがないところには交通網はできない。二次交通は県・市町村でサポートできるが、飛行機や電車だと莫大なお金が必要となる。先日大湯温泉に泊まったところ、九州ナンバーが多かった。どのように来るのかというと、仙台港にフェリーで来て、中尊寺を見て、角館まで来て、大湯まで来たようだ。人の流れはどんどん変わっている。

観光客の誘客は行政の責任でもあるため、今後も取組を続けていく。

(D氏)

今課題となっているのが、高齢化に伴った農業インフラの劣化。若い担い手で何とか手を入れているが、耕作放棄地でも、周りの水路に影響を与えるため、手を入れない訳にはいかない。自分の土地を把握していない地主も多く、そのあたりをロボットやITを駆使してうまくできないかと考えている。

(知事)

水路整備を全県でやるとなると莫大な予算が必要となる。整備しても人がいなければどうしようもない。大潟村で水路を全面改修すると、800億円の積算となる。水路整備に関しては我々の悩みどころでもある。Cさんのところで、うまい具合にロボットを開発できればいいのだが。

最近水不足と聞くが、今はいかがか。

(D氏)

以前は干ばつ気味だったが、今は持ち直した。枝豆についても、雨が降ったおかげで不作にはならないだろうと思っている。

(E氏)

子供の就職の話が出たが、自分にも中学生の子供がいる。大館ではふるさとキャリア教育というものをやっていて、子供が職場について学ぶ機会がたくさんある。職場体験の後の発表会があり見てきたが、「どんなことが大変ですか」という質問に対する企業からの回答がただの愚痴となっていた。受入れ側の企業も、子供たちが興味を持って来てくれているのだから、「ここで働いてみたいな、こういう業種で働いてみたいな」と思ってもらえるような受入れをしてほしい。せっかくの機会なのに、とてももったいなく、企業に対する教育も必要なのではないかと思う。

(知事)

観光面でも、秋田の人に「秋田のいいところはどこですか」と聞いても「何もない」と答える。少しずつ変わってきてはいるが、秋田では自分の所属を卑下するのが美德のようなところがある。その愚痴を言ってしまった社員は、空気を読めなかったのだと思われる。悪いことを隠すのもよくないが、「こういう趣旨だ」ということを伝えておけば回避できたのかもしれない。これは担当の方に伝えておく。

(F 氏)

当社に見学に来る生徒の95%が技術職を希望しており、これから技術を身につけて頑張っていきたいと考えている子供たちが、東京方面に行っても帰ってきてくれるような取組が必要だと考えている。最近の子供たちは、大企業に入りがんばりたいという感じではなく、自分のやりたいことをやって、しっかり休みを取りたいと希望する生徒が多いように思う。田舎でもできることはたくさんあり、必ずしも都会でやる必要性はなくなってきた。子供たちが都会から戻ってきてベンチャー企業などを立ち上げた際には、地元の企業と手を組んでビジネスを広げることができるようになればいいと思っている。

(知事)

I T 関係の誘致企業からは、秋田の人は離職率が低く、仕事の覚えが早く、粘り強い人材との話を聞く。今後 I T はメイン産業のひとつとなるが、どう伸ばしていくかが大事。I T であれば遠隔地でも働ける。アメリカの I T 企業は、都会の真ん中というよりも田舎の自然環境が恵まれたところにあることが多い。通信環境もよくなると地方で仕事ができるようになるし、東京で操作してこっちで動かすということもできる。そういった特色、可能性を A ターンの人も含めて P R していきたい。

(G 氏)

中学3年生になる子供が知的障害を持っており、地元の支援学校に通って自立に向けがんばっているところ。北秋田市では、高齢者向けの施設はたくさんあるが、知的障害向けの施設はほとんど東京委託で、地元の人をほとんど受け入れてもらえない。学校に通っているうちは自分も世話をできるが、卒業していくところがなくなってしまうと、男性と肩を並べて働いているお母さんも仕事を辞めて家で面倒を看なければいけなくなる。市へ請願書も提出したところだが、予算がなくどうすることもできないと言われたため、県で何とか対応できないものだろうか。

(知事)

障害者関係の施設は、国の予算の枠が少なく、大半は当初予算の段階で落とされ、補正予算で順番に対応している状況。建物を作ったとしても、東京委託の施設で指導員・従業員が多数働いていることもあり、専門知識を持つ指導員の確保が非常に難しい。国会議員の先生方にも要望を出しているところで、今後少しずつ予算も増えていくと思われる。

(A 氏)

この地域の仕事について、10年後、20年後にどうなっているのかと考えると、人が減るのは避けられないため、外国人労働者という選択肢が出てくると思う。秋田県の子供は学力が非常に高く、その教育ノウハウを外国人の教育に活用できないものか。秋田弁で日本語を学べば、ビザの問題もあるだろうが、秋田に定着してくれるのではないか。

(知事)

今後の増加が見込まれる外国人労働者については、入管法の改正により、業界団体や市町村等と協議会をつくり議論を進めているところである。繊維縫製分野は全国に組合のネットワークがあり、そこで教育を担当しているようだ。最近増えているベトナム人については、日本語の先生がベトナムの職業訓練校で日本語教育をしている。ある会社は、ミャンマーで日本語教育をする送り出し施設を作るといふ。海外である程度日本語を学ばない

と、技能実習生として日本に入国できないため、各種団体いろいろなパターンで教育しているようだ。

問題は、日本に来た後の日常生活のフォローをどうするかということ。地域で、人種の壁を越えて普通に接し合えるような雰囲気がないといけない。都市部と比べて農村部は外国人が少ないため、外国人を避ける空気がある。企業の方でもどのようにフォローするかが課題。

知事総括

本日は、皆さんが抱える課題や悩み、将来の夢など、いろいろな話を聞いて参考になった。前向きな話ができる、いつかプラスに転じる。先日の意見交換会では、人口減少は避けられないが、経済規模が維持できればかえって豊かになるといった意見がでた。そう簡単にいく話ではないが、地域だけで商売するのではなく、地域の資源・人材を使って外からお金を持ってくるという発想があれば、いくらでも可能性がある。皆さん方も、お互い異業者ではあるが、今回の意見交換会をきっかけに、情報交換しながら、希望を持って地域を盛り上げてほしいと思う。(了)